

Title	言語理論に基づくキリスト論の形成： アウグスティヌス『三位一体論』第15巻を中心に
Sub Title	The formation of the understanding of Christ based on the language theory in book 15 of Augustine's De Trinitate
Author	佐藤, 真基子(Sato, Makiko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2016
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.47 (2016. 3) ,p.49- 62
JaLC DOI	10.14991/005.00000047-0049
Abstract	『三位一体論』（399-419年）第15巻において著者アウグスティヌスは、「言葉」としての神の概念とわたしたち人間の言葉との類比関係に注目して議論を展開している。本稿では、この議論の分析を通して、アウグスティヌスにおいて言語理論とキリスト論がどのように関係づけて考えられているかを明らかにするとともに、そこで見出される彼の理解を、先行する著作における言語理論と比較することによって、その理論の変化の有無を検討する。第1項では、本巻の議論における「思考」概念と、三種に区分される「言葉」の概念を示す。第2項では、この「思考」の概念と関係づけてアウグスティヌスが「人間の言葉」と呼ぶ人間の心性への注目が、本巻の議論において特徴的であることを示す。その上で、本巻における言語理論が、ヨハネ福音書が語る「言葉」=キリストと人間の間に、「思考」に基づいて生き方の善悪が帰結するという時間的存在者としての類似性を見出す理解を導きだしていることを示す。
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000047-0049

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

言語理論に基づくキリスト論の形成：アウグスティヌス『三位一体論』第15巻を中心に

佐 藤 真基子

要 旨

『三位一体論』（399-419年）第15巻において著者アウグスティヌスは、「言葉」としての神の概念とわたしたち人間の言葉との類比関係に注目して議論を展開している。本稿では、この議論の分析を通して、アウグスティヌスにおいて言語理論とキリスト論がどのように関係づけて考えられているかを明らかにするとともに、そこで見出される彼の理解を、先行する著作における言語理論と比較することによって、その理論の変化の有無を検討する。第1項では、本巻の議論における「思考」概念と、三種に区分される「言葉」の概念を示す。第2項では、この「思考」の概念と関係づけてアウグスティヌスが「人間の言葉」と呼ぶ人間の心性への注目が、本巻の議論において特徴的であることを示す。その上で、本巻における言語理論が、ヨハネ福音書が語る「言葉」＝キリストと人間の間に、「思考」に基づいて生き方の善悪が帰結するという時間的存在者としての類似性を見出す理解を導きだしていることを示す。

序

本稿の目的は、古代キリスト教教父アウグスティヌス（354-430年）において、その言語理論とキリスト論の関係を分析することである。「言葉は神であった」（ヨハ1:1）、「言葉は肉となって、わたしたちの間に宿った」（ヨハ1:14）と語る「ヨハネ福音書」の言説は、キリスト教神学において、「言葉」の概念を手がかりに、受肉した神とみなされるイエス・キリストについ

での理解を形成する議論の一つの端緒となった。アウグスティヌスも例外ではない。彼は「言葉」を主題として体系的に「言語理論」を構築しているのではないが、『教師論』（389年）や『キリスト教の教え』（396-426年）など複数の著作において¹、わたしたち人間のもつ言葉のはたらきを分析する議論を展開している。そしてそれらの議論において受肉した神である「キリスト」の概念に言及していることは、アウグスティヌスが言語理論とキリスト論を関係づけて考えていたことを示している²。

他方で、H. A. G. Houghton が指摘しているように、比較的初期の著作においてアウグスティヌスが「ヨハネ福音書」に直接言及して解釈を展開することは少ない³。上で挙げた『教師論』や『キリスト教の教え』においても、「キリスト」の概念に関係づけて言語理論を展開しながらも、「ヨハネ福音書」との関係は明示的でない。また、パウロ書簡を始めとして聖書諸本の解釈に、彼は叙階直後（391年）から積極的に取り組んでいるが、『ヨハネ福音書講解説教』に取り組むのは比較的遅く、およそ415年前後になってからである。そしてこの『ヨハネ福音書講解説教』では、「ヨハネ福音書」第1章の、「神である」と言われる「言葉」の概念について論じてはいるものの、人間の言葉との関係については主題的に論じていない。このため、本説教のみから、ヨハネが「言葉」と表現するキリストについてのアウグスティヌスの理解と、人間の言葉についての彼の理論の関係を明らかにすることは難しい。

しかし、この『ヨハネ福音書講解説教』とほぼ同時期に執筆した『三位一体論』（399-419年）第15巻においてアウグスティヌスは、「言葉」としての神の概念とわたしたち人間の言葉との類比関係に注目して比較的長い議論を展開している。本稿では、この『三位一体論』15巻におけるアウグスティヌ

1 著作の執筆年代については、Peter Brown, *Augustine of Hippo: A Biography* (London: Faber & Faber, 1967) に準じる。

2 たとえば『教師論』第11章38節、『キリスト教の教え』第1巻34章38節。『キリスト教の教え』第1巻から第3巻の途中までは、すでに397年までに執筆された。

3 Hugh A. G. Houghton, *Augustine's Text of John: Patristic Citations and Latin Gospel Manuscripts*, Oxford Early Christian Studies (Oxford: Oxford University Press, 2008) 139.

スの議論を通して、言語理論とキリスト論がどのように関係づけて考えられているかを明らかにするとともに、そこで見出されるアウグスティヌスの理解を、先行する著作における彼の言語理論と比較することによって、その理解の背景と、彼の言語理論の変化の有無を検討する。

1. 人間のもつ三つの「言葉」

『三位一体論』第15巻は本書の最終巻にあたる。本巻においてアウグスティヌスは、はじめに第14巻までの議論を概観した上で（1章1節－6章10節）、わたしたち人間の精神には神の三位一体に似たある種の三位一体が見出されるとはいえ、それは神の三位一体と同一ではなく（第7章11節－13節）、神の似像であるわたしたちはその似像であるわたしたち自身をとおして、いわば「鏡をとおして謎において」（I コリ 13.12）創造主なる神を見る（8章14節－9章16節）と論じている⁴。そして「鏡をとおして謎において」見る、わたしたちの「見る」はたらきは、「精神の思考（*cogitatio animi*）」であり、思考するとき人は心の中で語っているとして、わたしたち人間の言葉に言及する。このわたしたち人間の言葉と、神の「御言」を関係づけて論じる議論が、10章17節から16章26節まで展開される⁵。

4 「鏡をとおして、謎において」とは、単に不明瞭な仕方で、という意味ではなく、類似をとおして、という意味であるとアウグスティヌスは解釈している（16節）。そしてそれは、人はその精神において神の似像であるという理解に基づく（11節）。かくして二者間の類似性に注目する仕方議論が展開される。

5 第15巻の議論構成をどう捉えるかについては、解釈者によって見解が分かれている。たとえばE. Hillは本巻全51節を、1-3、4-5、6-13、14-20、21-26、27-39、40-49、50、51に内容を区分している。対してG.B. Matthewsは1-6、7-12、13、14-16、17-21、21-22、23-25（of chapter 15）、25（of chapter 16）-51、J. Moingtは、1-3、4-5、6-16、17-26、27-38、39-50、51に分けている。いずれも分け方が異なり、本稿筆者がここで示した分け方とも異なる。じじつ本巻におけるアウグスティヌスの議論は分かりやすい構造をとっているように見え、議論の趣旨はとらえにくいものになっている。本稿で17から26節を神の言葉と人間の言葉についての議論としてとらえた点は、J. Moingtの解釈と一致している。Cf. Augustine, *The Trinity*, Edmond Hill (trans.) (New York: New York City Press, 1991); Augustine, *On the*

17節においてアウグスティヌスは、「知られたもの (nota) としてわたしたちが思考しているもの」と、「たとえ思考していなくても知 (notitia) において保持しているもの」についてここで論じると述べて、「知られたもの (知識)」と「思考しているもの」、ないし「知られたもの」がそこにおいて知られたものとなる「知」と「思考」の区別を提示している。たしかに人は思考するとき、何か知られたものを思考する。じっさい、思考していることならについて完全な仕方では知っているのではないとしても、いかなるものとしても知られていなければ、人はそれを思考することはできない。そして人はこの、思考の対象となる知識を自らの内に保持していると言える。じっさいわたしたちは、ある知識を思考しているときもあれば思考していないときもあって、それを思考し始めるときには外に求めなくても心の中でそれを思考し始めることができる。こうした、心における知識のありかをアウグスティヌスは「知」と呼んでいる⁶。思考の有無にかかわらず知識が「知」において存在すると語るアウグスティヌスは、「知られたもの」と「思考しているもの」、あるいは「知」と「思考」を、前者が後者に先行するものとして位置づけている。

知が思考に先行するのと同様に、彼は思考を、語り（発話）に先行するものとして論じている。

知られたものとして思考しているものと、思考されていなくてもすでにわたしたちに知られたものについて、今わたしたちは論じている。しか

Trinity, Gareth B Matthews (ed.) (Cambridge: Cambridge University Press, 2002) 167.; Œuvres de saint Augustin 16, Deuxième série: Dieu et son oeuvre, *La Trinité* (livres VIII-XV). 2. Les images. Texte de l'édition bénédictine. Traduction par P. Agaësse, S.J. Notes en collaboration avec J. Moingt, S.J. (Paris: Institut d'études Augustiniennes, 1997) 637-8.

6 「知」は「人間の知識全体 (universa scientia hominis)」とも言われている。notitia と scientia は、『三位一体論』の先行する巻の議論においても言い換える仕方語られ、両者は明示的に区別されていない。たとえば第9巻3章3節から6章9節において、これらの言葉が動詞 *noscere*, *scire* とともに多用されているが、いずれも区別なく言い換えられていると解釈しうる。

し、たしかに、わたしたちがそれらを語ろうとするなら、それらを思考されたものとして語るのではなければ、語ることはできない。というのも、言葉が音声として響くのではないとしても、思考するとき人はたしかに自らの心において語っているからだ⁷。

この引用にある「思考されたものとして語るのではなければ、語ることはできない」という説明は、「思考」の「語り」に対する先行性を示している。この場合もし「思考」を、特定の言語によって内的に語る自覚的な心のはたらきとみなすなら、必ずしも人は発話に先立つ内的のはたらきを自覚するとは限らないのであるから、「思考」が「語り」に先行するとは言えないであろう。人が語るときには、その語った言葉によって何らかのことがらを指し示しているが、そのことがら（知られたもの、知識）と語りの間にあって、語りを可能にする人間の内的のはたらきとして、アウグスティヌスは「思考」を位置づけていることがわかる。

このように「知識」ないし「知」と、「思考」、「語り（発話）」の三つを、順に、前者が後者に必ず先行するものとして提示する中で、アウグスティヌスは、人間の言葉を三つに分類している。人が語るとき音声として外に響かせる言葉と、その外に響く「音声の似像を思考においてめぐらせる (sonorum imagines cogitatione volvuntur)」ときの言葉、そしてそれら二つの言葉に先行する、ラテン語や日本語など諸言語に属さない言葉である⁸。

7 *De Trinitate*, 15.10.17.

8 アウグスティヌス『三位一体論』第15巻における三つの言葉の分類について、村上勝三は、「外なる言葉」、「内なる言葉」、「心の言葉」の三つとして説明している。(村上勝三「神の言葉と人間の言葉—アウグスティヌスの三位一体論より—」、『京都産業大学論集 人文科学系列 11、1984、61-76。』本巻でアウグスティヌスは「外なる言葉」、「内なる言葉」、「心の言葉」という表現は用いていないが、村上の分類は適切である。中川純男はこの言葉の三つの分類に基づいて、御言葉の類似としての言葉(村上の言う「心の言葉」)を *cogitatio* と呼んでいる。この呼び名は、本稿の次の引用にある、この「言葉」を「知っているものから形成された思考」と語るところから採用されていると思われるが、後に見るように、アウグスティヌスは、音声として響く言葉の似像として語られる言葉も思考のはたらきに含めている

音声としての言葉を「言葉」と呼ぶことは一般的であるし、また、音声にしないまでも、心の中で語るときその語りは音声としての言葉同様ラテン語や日本語などある特定の言語によって語られるから、それを音声としての言葉に似たものとして、言葉と呼ぶことも独特ではないであろう。しかしアウグスティヌスは、それら二つの言葉を「言葉」と呼ぶかぎりではなく、それらに先行する、特定の言語に属さない言葉があり、それこそが「ヨハネ福音書」の冒頭で語られる御言葉に類似した言葉であると論じる。この、特定の言語に属さない言葉について、彼は次のように述べている。

わたしたちが真実を語るとき、つまり知っていることを語るとき、当然言葉は、わたしたちが記憶に保っている知識そのものから生まれる。その言葉は、そこからその言葉が生まれる知識そのものと、完全に似たありかたをしている。たしかに、わたしたちが知っているものから形成された思考は、わたしたちが心において語る言葉である。この言葉は、ギリシア語でもなければラテン語でもその他の言語でもない⁹。

ここでアウグスティヌスが、語り一般ではなく、「真実を語るとき」の言葉に限定しているのは、虚偽は知識とは呼べないからである。たとえば「三角形の内角の和は180度である」は知識と呼びうるが、「三角形の内角の和は100度である」は虚偽であり、知識と呼ぶことはできない。人は、「三角形の内角の和は100度である」という虚偽を思考することもあるが、それは知識そのものから生まれたとは言えない。なぜなら、知識は真でしかありえないからである。そこで、真でしかありえない知識と、特定の言語によって語られる、ときに真であったり偽であったりする語りの間に、語りの真偽を分ける原因となるあり方が要請される。アウグスティヌスはそれを、特定の言語に属さない思考として位置づけているのである。

ので注意が必要である。(中川純男『三位一体論』におけることば論)(シンポジウム提題)、『中世思想研究』31、1989、152-163.)

9 *De Trinitate*, 15.10.17.

この、特定の言語に属さない思考のはたらきは、真の知識に似ているか似ていないかのいずれかである。「三角形の内角の和は180度である」と語るなら、それは〈三角形の内角の和は180度である〉ことを指し示し、それは真実に「完全に似た」ものである。だが「三角形の内角の和は100度である」と虚偽を語るなら、それは〈三角形の内角の和は100度である〉ことを指し示しながら、それは真実に似たものではない¹⁰。特定の言語による語りに先行し、真の知識に完全な仕方では似ているかそうでないかが分かれるあり方を指して、アウグスティヌスはそれを特定の言語に属さない「言葉」と呼んでいる。

特定の言語に属さないにもかかわらず、それをあえて「言葉」と呼んでいるのは、先の引用にあるように、この「言葉」は真の知識から生まれたものであるとき、その知識そのものに似たものであることに基づいていると考えられよう。というのも、先行するもの (res) から生まれ、先行するものに似ていることは、先行するものを指し示す記号であると言えるからである。それはちょうど、発話における語りの言葉が心の内における語りに先行され、且つそれに似たものであると同様である。言葉はことがら (res) を指し示す記号的役割をもつ。こうした、似たものとして指し示すあり方に基づいて、かの思考は「言葉」と呼ばれていると考えられる¹¹。かくして、特定の言語に属さない「言葉」を提示した上で、アウグスティヌスは、その「言葉」を「人間の言葉」と呼ぶ¹²。そしてこの「人間の言葉」が、「ヨハネ

10 とはいえ虚偽は、まったく真実に似ていないとすれば、それは別物であって虚偽とも言われ得ない。「三角形の内角の和は100度である」という言葉が指し示す〈三角形の内角の和は100度である〉ということからも、〈三角形の内角の和は180度である〉という知識に似たあり方をもっているから虚偽と呼ぶうる。『ソリロクィア』第2巻6章10節参照。

11 じっさい言葉とは、何らかのことがら (res) を指し示す (significare) しるし (signum) であるという考えは、アウグスティヌスによってしばしば提示されるものである。たとえば、「言葉は記号 (signa) である」(『教師論』第2章2節)；「言葉のように、そのあらゆる使用が、指示することにある記号が存在する」(『キリスト教の教え』第1巻2章2節)。

12 *De Trinitate*, 15.11.20.「人間の言葉、すなわち理性的動物の言葉、神から生ま

福音書」が語る御言葉との類似性をもつものであると論じる。

2. 「思考」への注目

ここまでの議論から読み取られた、人間の言葉をめぐるアウグスティヌスの理解を図示すると次のようになる。

発話における真の語り——思考における真の語り——真の「言葉」——《類似》——知識（真）
（特定の言語に属す） （特定の言語に属す） （特定の言語に属さない）
発話における偽の語り——思考における偽の語り——虚偽¹³-----《不類似》-----知識（真）

図において、実線で結ばれたところは、より右のものが左のものに先行し、右のものがあってはじめて左のものがあるという関係におかれている。三種に分けられた言葉、すなわち上の図では左から順に、発話における言葉、思考において特定の言語で語られる言葉、特定の言語に属さない言葉は、順に、前者の言葉は後者の言葉から生まれるもの、後者は先行するものとして位置づけられている。そして特定の言語に属さない言葉もまた、真の知識があってはじめて生まれる点で、知識が先行する。そしていずれも、先行するものは先行されるものよりいわば人の内面にあって、そのより内なるものと類似している点で、それを指し示す志向性をもつ。このように言葉をめぐるアウグスティヌスの議論には、人間の心を複層的なものとしてとらえる心理学的な様相があると言える。

言葉に対する知の先行性と、人間の心における知の内在を提示する彼の言語理論は、『三位一体論』より先に執筆された比較的初期のアウグスティヌ

れたのではないが、神によってつくられた、神の似像の言葉にまで到達しなければならない」。アウグスティヌスがそれを「人間の言葉」と呼ぶのは、「神の言葉」と対比するものとして位置づけているからであろう。

13 知識と不類似関係にある「虚偽」は、偽の「言葉」とは呼ばれ得ない。なぜなら、偽の言葉はもはや言葉ではないからである。

スの著作においてすでに示されている。たとえば『教師論』では、常に何かを指し示すという点で言葉がその典型である「記号（しるし）」と、「記号」が指し示す「ことがら」の関係について、「ことがらそのものが認識されることによって記号が学ばれる¹⁴」と述べて、「ことがら」の「記号」に対する先行性を指摘している。また、人は知を学ぶとき、「外に音声として響く言葉ではなく、内的に精神そのものの前に座す真理に相談する¹⁵」として、人間の内面に神的存在との接点を見出す点でも『三位一体論』の議論と一致している。この、「精神の前に座す真理に相談する」という表現は、知性的知を得ようと人が内的に探究する心のはたらきを指して言われているから、それは『三位一体論』第15巻における「思考」に相応すると考えられる。

しかし『教師論』では、「思考」の概念は言及されていない。それゆえ思考のはたらきに含まれるものとして『三位一体論』で語られる、特定の言語に属さない「言葉」についても言及されていない。言葉とその指し示すことがらの関係について『教師論』同様詳細に論じる『キリスト教の教え』においても同じように、「思考」の概念は関係づけて論じられていない。E. Morgan が指摘するように、『三位一体論』においても、すでに第4巻および第7巻において、人間の言葉と神の御言葉を関係づけて論じる議論があるが、それらの議論でも「思考」の概念や、かの特定の言語に属さない「言葉」についての言及はなく、これらの概念は第15巻に特徴的であると言える¹⁶。

アウグスティヌスが本巻の議論で、「思考」、および特定の言語に属さない「言葉」の概念を用いて議論を展開するのはなぜであるか。彼が、知識に似たものである真の「言葉」、すなわち特定の言語に属さない「人間の言葉」

14 *De Magistro*, 33.

15 *De Magistro*, 38.

16 *De Trinitate*, 4.20.28-30; 7.4.7. Cf. Edward Morgan, *The Incarnation of the Word: The Theology of Language of Augustine of Hippo* (London: T&T Clark, 2010) 37-41. Morgan は、「知—思考—言葉」ではなく「神—思考—言葉」の三段階として本巻の言語議論を読み取り、言葉は神への段階的超越にとって不可欠なスタートラインにあるものとしてアウグスティヌスがそれを重視していることに注目している。

に、子なる神であり真理であり御言葉であるものとの類似性を見出していることに注目しよう。「人間の言葉」と神の御言葉についてアウグスティヌスは二つの類似性を挙げている。一つは、真理と真のものとの間にある類似性である¹⁷。先に確認したように、アウグスティヌスが「人間の言葉」と呼んでいるのは、知識から生まれた、知識に似たものである。その知識は知識であるかぎり真でしかありえないことから、それに似たものは真であり、その知識を指し示す真の「言葉」であると言える。そして「ヨハネ福音書」によれば御言葉は真理であるから、人が真の「言葉」を得るとき、そこには御言葉との類似が成立することになる。

もう一つ挙げられる「人間の言葉」と神の御言葉の類似性については、次のように述べられている。

この謎において、「神の言葉」との次のような類似性にも注意を向けるべきである。すなわち、その「神の言葉」について、「それによって万物がつくられた」と言われており、そこでは、神は自らのひとり子である「言葉」によって世界がつくられたと言明されている。それと同様に、心において先に語られることのないような人間の行い (opera) はない¹⁸。

「行い」と訳した opera は、仕事、作品、業とも訳しうる言葉で、ここでは、人間が自ら生み出すことがらを指して言われている。「行い」が、ここで「心において先に語られる」と言われている根拠は、次のように解釈できよう。上述のようにアウグスティヌスは、神の御言葉に類似する「人間の言葉」を、思考において内的に語られる言葉（特定の言語によって語られる言葉）に先行し、その真の言葉を生み出すものとして位置づけている。そしてこの真の言葉は、音声によって外に響く真の言葉に先行し、それを生み出す

17 *De Trinitate* 15.11.20「知においてあるものが、言葉にもあるとき、それは真の言葉であり真理である」。

18 *De Trinitate* 15.11.20.

ものである。音声によって外に響く言葉も、思考において内的に語る言葉も、時間的なものとして人間が生み出す点で、「行い」であると言える。アウグスティヌスはこうした、時間的に存在する「行い」を生み出すはじめの原因として、「人間の言葉」をとらえ、神の御言葉同様善い行いを生み出すものとして位置づけているのである。先に見たように、この「人間の言葉」は特定の言語に所属しない思考である。「人間の言葉」のもつ、「行い」を生み出す創造性への注目が、『三位一体論』第15巻で提示される言語理論に特徴的な、「思考」の概念についての言及に帰結していると考えられる。

3. 言語論とキリスト論

「ヨハネ福音書」が語る、万物がそれによってつくられた神の言葉と、「人間の言葉」との間に、operaを生み出すという類似性があることを論じたアウグスティヌスは、続けて次のように述べている。

わたしたちの言葉が、この（神の言葉の）模範にしたがい倣うとき、わたしたちは正しく生きる。それはすなわち、わたしたちの言葉の観想あるいは活動において嘘をもたないとき、わたしたちは正しく生きるということである¹⁹。

ここで「わたしたちの言葉」と言われているものは、特定の言語に属さない「人間の言葉」を指していると解釈してよいであろう。あるいは特定の言語に属する言葉も含めて、三種の言葉全体と解釈することも可能であろう。というのも、先に確認されたように、アウグスティヌスは「知—思考—語り」は前者があつてはじめてそれに似たものとして後者が生み出されるという関係でとらえている。したがって、思考における言葉が真でありながら発話における言葉が偽であるといったことはありえない。知識に類似した理解

¹⁹ *De Trinitate*, 13.11.20.

を得たなら、思考における真の「言葉」と、その「言葉」から生まれる特定の言語に属する真の言葉が帰結するし、また偽の理解を得ているときには、偽（それはもはや「言葉」とは呼べない）と、その偽から生まれる、特定の言語によって語られる偽の言葉がある。たとえば嘘をつく場合のように、真の理解を得ながら虚偽を発話する場合であっても、何が真実であるかを知っている（あるいは信じている）のでなければ嘘をつくことはできないように²⁰、真の理解を得ているかぎりにおいて、そこには対象を真のものとして意識する思考、すなわち特定の言語によって思考する真の語りがある²¹。特定の言語によって思考において語られる言葉と、特定の言語に属さない「言葉」は、その真偽において常に一致する。したがって、「わたしたちの言葉」は、特定の言語に属さない「言葉」であり且つそこから生み出される時間的な言葉でもあると言えよう²²。

上の引用で注目すべきは、言葉をめぐる議論が、ここで人間の生き方の問題に展開していることである。言葉をめぐる議論の限りでは、特定の言語に属さない「言葉」の最終的な帰結は、発話における言葉であったが、ここではそれが、言語活動にとどまらない、生そのものに広げて考えられていることが示されている。上の言明に続く箇所では、「善き教師がわたしたちをキリスト教の信仰と敬虔の教えで導く」とも言われ、「善き教師」すなわちキリストに関係づけて論じられている。言葉をめぐる議論が、キリストを教師として生きる人間の生き方の議論に展開しているのである。

たとえば『教師論』においても、人間に知を教えるのは、人間の内なる教師であるキリストであるという仕方で、言語理論にキリストの存在が関係づけられている。しかし『教師論』におけるキリストの概念は、「真理」の概念と言い換えられてもいて、歴史的な存在者としてのキリストの概念とは区別

20 Cf. *De Trinitate*, 13.15.24.

21 嘘つきの咎は、嘘をつくという意志が、神の言葉に似た「人間の言葉」ではない点で、「偽」であることに見出される。この場合帰結する、偽なる *opera* は、語られた偽の命題そのものではなく、嘘をつくという行為そのものであることになる。

22 むしろこの三種の言葉の一連の結びつきを念頭において、あえてアウグスティヌスはここで「わたしたちの言葉」と表現をしているとも考えられる。

されている²³。それに対してこの『三位一体論』第15巻の議論では、真理としての子なる神との類似にとどまらず、じっさいに思考にもとづいて時間的な「行い」に及ぶ歴史的な存在者としての、子なる神とわたしたち人間との類似が論じられている。こうした議論を可能にしたのは、本稿前節で見たように、神の言葉と人間の言葉の類似を、前者の真理としての側面に限らずその創造性に着目する議論と、人間のもつ非時間的な思考が、時間的な行為の真偽ないし善悪に帰結するという、行いの原因としての「思考」の概念に着目する議論である。これらの議論を導入することによって、『三位一体論』第15巻の議論は、言語理論が人間の生き方の問題に展開している。それは、「ヨハネ福音書」が語る神の「ロゴス」を、超越的な「理法」として理解するばかりでなく、さらに真のもののアイデアとしての「真理」と理解するばかりでもなく、受肉した存在者として理解する考えに基づいていることは確かであろう。

こうした、『三位一体論』における言語理論からキリスト論への展開は、初期著作から長年取り組まれていた彼の言語をめぐる哲学の深化とみなすべきか、あるいは著作の主題に即したバリエーションとみなすべきかについては、さらに検討が必要であろう。しかし、ある種の深化があった可能性を示唆する事実を挙げることができる。『キリスト教の教え』第4巻の議論である。アウグスティヌスは本書の執筆を、397年頃に中断した後、426年までに第3巻途中から第4巻まで書き上げ完成させた。すなわち第4巻は、『三位一体論』執筆後に書かれた議論である。その第4巻の議論においてアウグスティヌスは、言葉と生のあり方を関係づけて論じている。その議論は、言葉そのものよりも心のあり方を重視し、その心のあり方が生のあり方に帰結するという見解を示している点で、本稿で見た『三位一体論』第15巻の議論と共通している。この見解は、『キリスト教の教え』第3巻までの議論では示されなかったものである。

23 *De Magistro*, 38.

他の人びとに模範を示すようにすべきである。その生き方が、いわば雄弁となるように。(中略) じっさい、行為において否定していることを、どうして言葉において語ることがきょうか²⁴。

結語

アウグスティヌスの『三位一体論』は、すでにニカイア公会議(325年)で提示された三位一体に関する神学を共有する中で執筆されたものである。とはいえアウグスティヌスの議論は、出来上がった神学をその他の議論に反映させるのではなく、むしろ彼が長年培ってきた哲学的議論を展開させながら、神学を形成していくものである。本稿で検討した限りにおいても、彼が『教師論』など初期著作以来取り組んでいる言葉をめぐる議論を持ち込んで、議論を構成していることが見て取れる。

とくに本書15卷にける彼の言語理論において注目すべきことは、先行する別の著作における言語理論では明示的に言及されることのなかった、「思考」の概念を導入することによって、言語理論を人間の生き方の問題に展開している点である。「ヨハネ福音書」が語る、「ロゴス」としての神の理解は、それを「真理」としてとらえる限りにおいて、あるいは神の意志を指し示す記号としてとらえる限りにおいて、先行する著作でも明示的ではないにしてもすでに言語理論に導入されていた²⁵。しかし『三位一体論』第15卷では、受肉した神としてのキリストの生き方への注目が、言語理論を通して促されている。この展開を、アウグスティヌスの言語論全体における深化とみてよいかどうかについては検討の余地があるが、少なくとも彼の言語理論が彼のキリスト論の多面性を形成しているということは言えよう。

24 *De Doctrina Christiana* 4. 29.61-62. 生き方と言葉の関係を論じる議論は、27章59節から本巻最後の30章63節まで展開されている。

25 神の意志を指し示す記号として「ヨハネ福音書」が語る「ロゴス」を解釈する考えは、『83問題集』第63問で提示されている。